

# SFCの七不思議

世界の七不思議、という表現がある。古代のものとしては、エジプト（ギザ）の大ピラミッド、バビロンの空中庭園などが含まれる。それ以外についても、中国の万里の長城、英国（ソールズベリー）の巨大石組み遺跡のストーンヘンジ、さらには米国のグランドキャニオンといった自然界の事物を含めるケースもあるようだ。いずれの場合でも、該当する事物は、それが人工物であれ自然物であれ驚異的な存在であること、あるいは存在理由が常識的理解を超えること、などが共通点といえる。それらの中には、すでに消滅したものもあれば、現存するものもある。

この類推によれば「SFCの七不思議」を述べることもできるのではないか。かつては不思議に思っていたが現在ではそうでなくなったものがある一方、筆者にとっては依然として不思議なこと、あるいは新しく生まれた不思議なこともある。SFC前進のための議論を誘発することを意図して以下私見を記してみたい。

## 一、キャンパス正面の階段と滝

筆者にとって着任以来不思議だったことの第一は、SFC正面入口の階段の作り方とその横に設けられている階段状の滝（カスケード）である。SFCの建物に入ろうとする時には、滝のそばを通ることによって修験僧のように水で身を清めつつ、この幅広く緩やかに作られた階段を登って学問の世界に入る仕組みにしてあり、このことを学生諸君に意識してもらったためにこれらを作ったのだ、と加藤寛先生（初代総合政策学部長）から伺ったことがある。SFCの教室群は、道路より小高い位置にあるのでそれらをアテネのパルテノン神殿になぞらえることができ、それに入る前に滝で身を清める、という発想はすばらしいと思ひ。

ただ不思議だったのは、その階段の歩幅が（設計者が意図してか否かは知らない

が)著しく不自然で歩きにくいものであったことである。もし身長二・四メートルの巨人がいたとすればその人にとっては多分適切な歩幅であったであろうが、普通の人間にとつてはたいへん歩きにくい間隔でステップが作られていた。多くの人が長年この不思議な歩きにくい階段を我慢して使用してきた。しかし幸いにも昨年(二〇〇五年)夏、さすがに補修の対象となり、ステップを正常化する工事が行われた。その結果、SFCの不思議は一つ消滅したといえる。

一方、それとほぼ同時に大掛かりな補修工事が行われた階段状の滝については、補修後にほとんど水流を見ることがなくなってしまった。毎日この横を通るたびに目にするのは、干涸びたコンクリートと、あおさが繁殖し濁った水である。かつてのような爽快な気分になることはもはやない。これは多分、電力節約を意図した措置であろうが、現在水流を見るのはおよそ半年に一回位でしかない。これはSFCの新しい不思議である。わざわざ補修したのに、その装置をほとんど活用しないのはもったいないではないか。経済性だけを優先するあまり、水を見つつ教室や研究室に向かつて行く爽快さという大きな効用を過小評価しているのではないかと思う。他の費用を節約することによつても、例えば週一回程度は滝の流れを復活させることはできないだろうか。

## 一、講義受講中の食事

第二の不思議は、SFCでは講義受講中に学生が食事をする事が容認されていること(あるいは少なくとも実態としてそうになっていること)である。SFCでは、時間割作成上の制約などから昼食休憩時間を設けるのが困難であり、このためこうした現実が生じている(あるいは許容されている)というのが一般的説明のようだ。また、そのことをもつて、SFC学生の勉強熱心さの例とされることもある。さらに先般、たまたま学生が何かの発表をしている授業中の様子が歩道から目に入ったが、そこでは何と担当教員(とおぼしき方)が弁当を食べながらその発表を聞いておられた。これには我が目を疑った。

この面での規律の欠如（良くいえば柔軟さ）は、筆者が海外の大学からSFCに着任して不思議だと思ったことの一つである。かつて、ある学部長にこの現象を質問したところ「受講中に学生が食事してよいなどというルールはありえない」とのことであり、やはりそうであるつと自分なりに納得した。SFCは国際性を標榜している。しかし、少なくとも受講中に食事が許容されるというのは、筆者が海外の大学等で経験したことはかなり異質の現象であり、これに国際性があるとは筆者には思われない。

講義の受講、あるいは授業中の教室には緊張感がみなぎっていないなければならない。そうした環境を維持するのは講義担当者の責務ではないか。ちなみに、筆者が担当する授業のシラバスには、履修上の注意として次のように記載している。…「この授業を受ける場合には次の点に留意すること。」（一）授業中の食事（但し飲み物をのぞく）は、社会通念に合致しないだけでなく、他の受講者の迷惑になるので認めない。（二）私語が目立つ者は、他の受講者の迷惑になるので名指しをして退室を命じることがある。（三）教室内では帽子をとること。「これらの点につき学生からクレームが付いたことは幸いにして一度もない。むしろ学期末の授業評価調査表では「当たり前のことをきちんと教えてくれた（違反者には注意を促してくれた）」のは当然であり有難いことである」という記載が少なくない。

むろん、共同研究のためのインフォーマルな討議、各種の学内会議、あるいは昼食セミナーなどにおいては、討議や会議に際して食事をするのは一向に構わない。むしろ、時間の効率的利用の点でそれが望ましい場合もある。しかし、講義を受ける時にものを食べることは、食べながらテレビを見るのとは次元が異なる。受講者は、講義担当者が誰であれその人に敬意を払う必要がある（これは社会一般の不文律ではないか）。受講中に自分勝手に食事をすれば、包みを解く音、食物の匂い、手や口の動き等が周囲の受講者の迷惑になる。教員と学生はこれに気付かねばならない。昼食時間帯に履修科目が重なってしまうような日があるならば、学生自身その日の昼食の取り方を工夫すべきである（例えば昼食を通常時間よりもずらすとか、

小分けの食事にするなど)。

この問題を含め、近年のSFCはネオ・バーバリズム(新しい野蛮さ)に陥っている、と評した教員がいる(その方は数年前に退職された)。むろん万事に規制をかけたなり、あるいは文書化したりする必要はないし、またそうしても問題が解決するとは限らない。しかし授業中の食事容認の慣行に関しては、いま一度再検討の機会を持つてはどうだろうか。

### 三、禁煙化問題

第三の不思議は、キャンパスおよび学生に対する禁煙化の推進が大きく遅延していることである。建物内の禁煙(但し個人研究室を除く)だけは数年前にやっと実現したが、それ以外ではなお発展途上国並みという感じがする。屋外での受動喫煙を防ぐ配慮がまだ十分になされていない。また、喫煙者に対して健康上の観点から禁煙化をすすめるという運動はSFCではまだ何も具体的に打ちだされていないように見える。国際性を標榜するキャンパスとしては不思議なことだ。

SFCの銀座通りともいうべきメディアセンター前のアーケード帯は、ベンチがあり学生にとって良くつろぎ場所である。しかし、それらベンチの横には灰皿が配置されており、この周辺は事実上喫煙者が占有する地域となっている。SFCにおける全ての通路の中でも、この一帯はおそらく学生、教職員とも最も頻繁に行き来するところであろう。そこを通ろうとする場合、受動喫煙を余儀なくされるのはキャンパスとして配慮が欠如しているといわざるをえまい(筆者は息を止めて足早に通り過ぎることにしている)。この状況は再検討する必要があるのではないか。それと同時に、そしてより積極的には、喫煙者に対して健康上の観点から禁煙を進める運動が推進されるべきではなからうか。喫煙は個人の問題だ、というだけではもはや済まされない。SFCはその学生全体の健康の管理ならびに向上に務める責務がある。SFCはこの面でも他大学をリードすべきではなからうか。

ちなみに、筆者が比較的頻繁に研究滞在するオーストラリア国立大学(ロンドン

のタイムズ紙によれば世界の大学ランキング十八位の有力大学)では、建物内は個人研究室も含めて全面禁煙になっているほか、屋外で喫煙する場合には、建物の出入り口、窓、換気取り入れ口などから少なくとも一〇メートル離れた場所で行なうこと、などが厳格に規定されている。

#### 四、環境情報学の定義

第四の不思議は、環境情報学がどのような「学」なのか曖昧なままになっていること(少なくとも筆者にはそうみえること)である。環境情報学部の卒業生に授与される学位記には「学士(環境情報学)の学位を授与する」と明記されている。したがって、環境情報学部の教員には当然それをきちんと説明することが求められる。

ところがSFCの公式刊行物(例えば「SFCガイド」)をみても、環境情報学部では色々な先端的研究が行われており学生はそれらに関する科目を履修できるという説明、あるいはSFCにおける科目履修形態の説明、などが記載されているだけであり、肝心の環境情報学がどのようなものなのかは定義されていない。不思議なことである。また、有力教員の中には「環境情報学は単なる符牒として使っており、各種先端分野を含むことが示唆できれば十分であり、格別の意味を持たなくても良い」と豪語する方もいられるようだ。しかし、それは組織として誠実な態度とはいえない(厳しくいえば日本語の冒流である)と私は思う。

たしかに、現在の環境情報学部の実体は、SFC創設者が想定していたものと比べれば、研究領域・スタッフ・カリキュラム等の面でかなり異なった展開になっている面も少なくない。そういう実体自体をどう評価するかは難しい問題である(私には評価能力がない)が、重要なのは看板と実体を合致させる必要があること(つまりインテグリティの維持)である。

そのための方途は二つある。一つは、学部名を実態に合わせたものに変更することが考えられる。例えば「環境・情報学部」「先端サイエンス学部」などアイデアは幾つでもあろう。確かに、これまで使用してきた学部名を変更することには大き

なコストを伴うが、長期的にみれば、それはキャンパスのインテグリティ維持とトリードオフ関係にある問題と理解すべきだろう。ちなみに、SFCが他大学に先駆けて一九九八年に実施した外部評価の報告書「慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスに対する評価…提言書…」(外部評価委員七名によるものであり外部にも公表)の第十二項においては、長期的課題として学部名称の再検討が一つの課題として指摘されている。

いま一つの方途は、学部名称を変えるのではなく、環境情報学を(再度あるいは新たに)定義する努力をすることが考えられる。これは苦勞の多い作業となるが、筆者の直観ではこの方がより実り多い結果をもたらすように思われる。なお、総合政策学部については、類似の問題はまずないといえよう。なぜなら、総合政策学とは何か、という問題意識はこれまで多くの教員が常にもってきた(と思われる)し、またそれを明確化しようとする努力が継続的になされてきており、現在も進行中であるからである。ちなみに、政策系のCOE研究グループはごく最近書籍『総合政策学・問題発見・解決の手法』を刊行している。

## 五、キャンパスレベルのセミナー

第五の不思議は、SFC全体としての(あるいは学部としての)研究セミナーの仕組みが存在しないことである。SFCでは従来、教員は各自が研究活動をする、あるいは少人数からなる研究グループで研究を進める、という体制がとられてきた。「自立・分散・協調」の精神だ。しかし、いずれの学部とも学部主催の定例的なセミナーの仕組みを持たないまま現在に至っている。

学部として定例セミナーの枠組みを持っていれば、教員相互によるシナジー効果をさらに高めることが期待できるのではないか。また外部の研究者によるセミナーもそこに埋め込めば、良い触媒機能を期待できると思う。あるいは、新任者の研究方向を開示してもらうためにその場を活用することまできょうじ。

このようなセミナーの仕組みは、筆者の経験によれば国内外を問わず有力大学で

は学部として必ず備えているものであり、研究推進（博士課程学生の論文完成を含む）のうえで重要な役割を担っている。幸い、SFC研究者グループは、数年前に文部科学省のCOEプログラムに二件採択されたので、そのプログラムを通して研究上協調する機会が増えている。また筆者自身も、毎週水曜日に「ブラウンバッグランチセミナー」を数名の同僚とともに開催している。しかし、これらはいわばSFC内でもローカルな研究セミナーにすぎず、学部としてのがっちりとしたものではない。制度化した研究会合（定例セミナー）を学部として持つことはやはり重要だと思う。

例えば、次のような考え方によるSFCセミナーの導入はどうだろうか。第一に、全教員がキャンパスに居る水曜日の一時から二時（あるいは一時から一時半でもよい）に開催する。第二に、この時間はセミナーだけの時間とし他の会議等は設定しない。第三に、責任者を決めその方が学期中のスケジュールを管理する、などである。水曜日は、多くの教員が一堂に会することのできる貴重な日である。それにもかかわらず、現在はほとんどの会議が学部運営などのためのものでしかなく、知的刺激を相互に受ける日とはなっていない。SFCの不思議のゆえんである。SFCでは教員の多様化が進んでおり、教員相互の関係（面識）もひとところに比べれば相当希薄化しているように思われる。上記セミナーを導入すれば、相互に緊密化する一つの契機ともなる。

なお、余談であるが、SFC教員全員の経歴や研究領域等を記載した小冊子「教員プロフィール」は教職員、学生にとってバイブルともいえるが、近年は顔写真の掲載が欠如している例が増えている（今年度版では実に二十四名もの教員の顔写真が未掲載である）。キャンパスにおける教職員・学生の一体化を進めるにはこうした小さな（しかし重要な）点にも十分配慮すべきであろう。

## 六、SFC教育革新の履歴

第六の不思議は、大学教育の先端を行くと自認しているSFCでありながら、そ

の軌跡を文書ならびにモノについて系統的に残すという発想ならびに行動が乏しいことである（SFC教育アーカイブの未整備）。常に未開拓の研究に挑みつつ先端を走るのは、確かに大きなエネルギーと時間を必要とする。ただ、そうした実験や経験にはそれ自体に大きな意味がある。したがって、その履歴を系統的に残していくことは、日本における大学教育関係者あるいは大学教育史にとって重要な事業である（いわば一種の社会貢献ともいえる）。SFCにはこの意識が比較的希薄なことが一つの不思議である。

確かに、創成期一〇年余を記録した書物『未来を創る大学』は刊行された（二〇〇四年）。しかし、SFCが創始した歴史的ともいえる多くの事物や資料等は散逸しつつあり、いま保存活動を開始してももはや手遅れとなっているものがあるかもしれない。しかし、何よりもSFCが上記の意識を持つことが必要だと思つ。

系統的な収集と整理が期待されるものとしては、例えば上記書物『未来を創る大学』を執筆するために関係者が収集した創設期の各種資料（研究室一室分相当もあつた）はその後どのように整理ないし保管されているのだろうか。メディアセンターに設置されているコンピュータは更新時期がくれば産業廃棄物運搬トラックに乗せて一括処理されているのを見かけるが、例えばSFC開校時の第一号機は保存されているのだろうか。また、SFCが日本で最初に導入した授業評価の原票は、保管能力の制約から最近多くが廃棄処理される一方、創成期の現物は保管する扱いとなったが後者はどのように整理・保管されようとしているのか。先日、上述したSFCに関する「外部評価報告書」（一九九八年）の写しを見ようとしたところ、何とSFCメディアセンターにもそれが保管されていないことがわかり驚いたことである。そして、当初は教員そして学生とも大いに活用していた在室ランプ一覧板（学事掲示板の左側に設置）も、現在は誰も関与しない無用の長物となった感があり、文字通り博物館行きの候補かもしれない（これは半分冗談）。

SFCでは、自らの教育を中心とする各種資料を一箇所に集める仕組み（アーカイブ）を作る意義とその必要がある。例えば、SFC授業ガイド、キャンパスラ

イフ調査、授業調査表、イヤブック、SFCレビュー誌、運営委員会議事録、教員プロフィール、初回のAO入試願書、CNS（キャンパスネットワークシステム）ローカルガイド、各種写真記録、SFC関連の新聞・雑誌記事、各種システムや物（コンピュータ等）など。それを担当する教員および事務員を（他業務と兼務して）任命するとともに、そのためのスペース等を確保し「継続は力なり」をモットーにしてこれに取り組んでゆく必要があるのではなからうか。そのシステムを作っておけば、いずれ編纂の時期がくる『SFC二十五年史』の作成も容易になるう。

## 七、教職員向けリフレッシュ・サービス

最後、第七番目の不思議は、教職員のために各種運動種目へ自由にそして無料で参加させてもらえるプログラム（リフレッシュ・サービス）が頻繁かつ継続的に提供されていることである。これは、体育科目担当の教員の皆さんが学期中一・三週間おきに企画、実行して下さっているSFC内のプログラムである（一回分は夕方約一時間半）。これらの方々による自主的な教職員への奉仕活動として行われている点がまず特徴的である。また、これまでに開催された種目としてテニス、バレーボール、ゴルフ、ボーリング、バスケットボールといった比較的一般な種目はもとより、フットサル、気功、エアロビックス、早朝ウォーキング、トレーニング、剣道など、多種多様なものが経験できることもいまひとつの特徴といえる。さらに、これら種目を指導して下さるのは、その種目の専門家である点も他に例がない。

大学という組織においてこのプログラムほど贅沢なことが提供されている例を筆者は寡聞にして知らない。これはSFCがコミュニティとして誇るべきことであり、まさにSFCならではの不思議といえる。リフレッシュ・サービスは開始以来すでに七・八年経過しており、毎回七・八人から二〇人程度の教職員が参加している。おカネが全てといった悲しい風潮が広がるこの世の中で、これは実にありがたいことだ。S先生をはじめ体育関係教員の皆さんに深く感謝している。筆者も、仕事や他のスケジュールを多少犠牲にしてもできるかぎりこれに参加させてもらっており、

従来全く経験したことがなかったスポーツを種々新たに体験できた（気功、剣道等）。とくに早朝ウォーキングは、SFC周辺の林野の様子を知ることができるよう、その日の始まりにとって新しい気分をわき立ててくれる。余計なことかもしれないが、教職員の多くの皆さんが積極的にこのプログラム（SFCの宝）を活用することを期待している。なおリフレッシュ・サービスの詳細は、楽しい写真付きの下記ウェブページに掲載されている。

<http://www.sfc.keio.ac.jp/wellness/refresh/index.html>

筆者は、上記第七番目の不思議は今後とも残してもらいたいと考える一方、それ以外の不思議は解消していくことを期待している。

（慶應義塾大学SFCオンラインニュースレター「パンテオン」、二 六年四月）